新宗連スローガン
信教の自由を守ろう
信仰心を広めよう
宗教協力を進めよう
世界の平和に貢献しよう

新宗教新聞

2025年（令和7年）
3月11日
第1151号

発行所
新日本宗教団体連合会
（略称 新宗連）
〒151-0053
東京都渋谷区代々木5丁目57番10号
電話（03）3468－5551（代表）
（03）3468－5588（編集）
大阪事務所 〒550-0006
大阪市西区江之子島1丁目8番21号111
電話（06）6443－7178

新宗連

第33期第3回理事会

令和7年度 事業計画・予算を承認

特別事業「すべてのいのちを尊ぶ世界」実現推進事業へ

全議案を原案通り承認した理事会

新宗連（石倉寿一理事長）は2月17日午後1時から、新宗連会館とオンライン併用による「第33期第3回理事会」を開催した。

理事会の冒頭に先達への感謝と世界平和の祈念、併せて昨年12月6日に逝去した、元新宗連常任理事で円応教名誉参与（元理事長）の小坂和導（かずみち）師の冥福を祈った。

石倉寿一理事長の開会あいさつの後、審議事項に移り、令和7年度事業計画案並びに予算案について審議した。

事業計画案では活動方針・重点課題とも昨年度計画をほぼ踏襲する内容だが、重点課題の一項目「緊迫する国際情勢、地球環境危機等を注視するとともに、戦争犠牲者、自然災害犠牲者をはじめとする物故者追悼の祈りを深める」の後半に「特に、終戦80年の節目を迎えるにあたり『すべてのいのちを尊ぶ世界』実現推進事業に努める」を追記した。

特別事業となる「『すべてのいのちを尊ぶ世界』実現推進事業」は令和6年度から7年度の2年間にわたるもので、理事会では田澤清喜企画委員長が実施概要「改定版」について説明。「目的」では①祈りと慰霊（平和を希求する心の養成）、②すべてのいのちの尊重、③新宗連が大切に積み重ねてきた特性を活かして共に祈り行動する―と明記した。

その具体的事業として、①平和への巡礼Ⅰ―タイ、Ⅱ沖縄―5月21～23日（前段プログラム・鹿児島―4月21～23日）、②目的やねらいに基づく意見交換会、学習会（教団人セミナー）等―が示された。

また、新宗連青年会が毎年8月14日に千鳥ケ淵戦没者墓苑で開催してきた「戦争犠牲者慰霊祭並びに平和祈願式典」については、宮本泰克青年会委員長が報告。同式典の日程を近年の異常気象や猛暑等を考慮し、青年会結成日（11月26日）を軸に毎年11月下旬に開催日を変更し、今年は11月30日に開催することを説明した。

千鳥ケ淵墓苑「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」は11月開催

引き続き、予算案並びに資産運用方針、宗教法人審議会委員の推薦、次回定時評議員会の日程について説明と提案があり、すべて原案通り承認した。このほか10月8、9日の全国総会の会場を大阪市内のホテルで開催することを申し合わせた。

報告事項では前回理事会（昨年10月8日）以降の新宗連本部並びに委員会・機関、新宗連青年会、能登半島地震被災地へのボランティア派遣、宗教界の動向などの報告があった。

新宗連

「すべてのいのちを尊ぶ世界」実現推進事業
平和への巡礼Ⅰ

タイ ナムトクの丘で平和祈願式典
戦争の記憶を胸に 平和実現を誓う

新日本宗教団体連合会（新宗連、石倉寿一理事長）は2月22日から26日まで、「すべてのいのちを尊ぶ世界」実現推進事業の一環として「平和への巡礼Ⅰ」を実施し、石倉寿一理事長を団長とする使節団をタイ王国へ派遣した。今回の使節団は終戦80年を迎えるにあたり、先の大戦の傷跡が色濃く残るタイ・カンチャナブリ県を訪れ、戦争犠牲者慰霊を行うとともに、平和活動の原点と歴史を改めて見つめ直し、先師先達の行動から学び、未来に向け平和の誓いを新たにした。（4面に詳報）

新宗連役員、青年会委員長らが参加

「世界平和祈願文」を奏上する石倉理事長㊧（24日、ナムトクの丘）

使節団は22日午前、羽田空港を出発し、タイのバンコクへと向かった。到着後、結団式を行い、巡礼の意義を確認。翌23日、カンチャナブリ県へ移動した。

連合国軍共同墓地、カンチャナブリ慰霊塔、クワイ河平和寺院を巡拝。また、JEATH戦争博物館をはじめ、泰緬鉄道博物館、メクロン鉄橋を見学した。

24日、一行はサイヨーク・ノイ国立公園内のナムトクの丘にあるサンプラプーン（タイ式供養塔）を訪れ、「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」を実施。この供養塔は泰緬鉄道建設の犠牲者を慰霊するため、1974（昭和49）年に第1次東南アジア青年平和使節団（『栞』参照）一同の真心によって建立され、新宗連青年会平和活動の原点と位置付けている。

式典は田澤清喜企画委員長の開会あいさつの後、全員が献香、献花を行い、石倉理事長が「世界平和祈願文」を奏上。戦争のない未来を築く決意を新たにし、「絶対非戦」精神のもと、恒久平和の実現を祈願した。この後、9教団の代表者が教団別礼拝を行い、慰霊と供養の誠を捧げた。

午後にはヘルファイア・パス・メモリアルやワンポーの木橋を訪れ、強制労働の過酷さと犠牲者の苦しみの跡を残す地を歩き、思いを馳せた。

25日、一行はバンコクに戻り、立正佼成会バンコク教会で解団式を実施。巡礼を振り返るとともに、今後の平和活動の在り方についても議論を交わした。

WCRP日本委員会

第3回東京平和円卓会議を開催
理事会・評議員会で承認

立正佼成会法輪閣で開催された理事会

世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会（戸松義晴理事長）は1月31日正午12時から、東京・杉並の立正佼成会法輪閣で「第50回理事会・第29回評議員会」を開催した。

開催に先立ち、参加者は平和の祈りを行い、戸松義晴理事長が開会あいさつを述べ、議事に移った。

理事会の審議事項では、「日本委員会人事」や「2025年度事業方針」など5つの議案が審議され、原案通り承認された。人事では立正佼成会の庭野日鑛会長が顧問に就任。理事では阿部昌宏・天台宗前宗務総長が退任し、細野舜界・天台宗宗務総長が就任した。

また、6月30日から7月3日まで東京で開催される「第3回東京平和円卓会議」の詳細を審議し、承認した。同会議は2022（令和4）年と24（同6）年の2回、東京で開催。紛争国・地域の宗教者が、紛争解決の行動を約束する声明文を採択した。第3回の会議では、声明文で誓い合った実践の成果と課題を確認し、さらなる和解の実践に繋げることを目的としている。

このほか、報告事項では、法人業務や国際事業の活動内容、タスクフォースと常設機関の今後の取り組みが紹介された。

理事会の後、評議員会でも同様の議題が審議され、同様に承諾された。

WCRP国際委 新事務総長 クーリア氏がビジョン語る

理事会・評議員会後には、法輪閣大ホールを主会場にオンライン併用で「新春交流レセプション」を開催した。今回は昨年2月にWCRP国際委員会事務総長に就任した、アフリカ宗教指導者評議会事務総長のフランシス・クーリア・カゲマ氏（写真）を迎え、トークセッションと交流会を行った。

トークセッションではクーリア事務総長とWCRP日本委員会の戸松義晴理事長が登壇し、クーリア事務総長からWCRPグローバルネットワークの今後のビジョンが語られた。

クーリア事務総長は、一貫して「シェア」（share、分かち合う）の重要性を強調。平和と調和に基づいた構想として、「幸せを分かち合っていくこと、今ある恵みを感じて生きる責任を分かち合っていく」という全ての人が、自分に問われた責任を自覚することが大切と明示。さらに地球規模で生きていくためには消費主義に陥るべきではなく、個人の欲求にとらわれることなく、全体を俯瞰的に見て、健全な社会の在り方を見極める広い視野を持つ重要性を訴えた。

また、WCRP日本委員会並びに日本に対する願いと期待について問われると、次の3点を回答した。

①日本人の許しの力・分かち合いの力を姿で現わしていく。②倫理的・道徳的な価値観を宗教は持っていることを認識する。③人というコミュニティとアイデアという想像力、財政面での支援を遺憾なく発揮する。

クーリア事務総長は最後に「シェアという分かち合う人生にこそ、幸せで健康な社会が保たれる」と願いを込めて結んだ。

海々抄

ナムトクの丘 22年後の思い
今こそ平和実現のため、具体的場づくりを

私は22年前（2003年）の2月22日、タイ王国にいました。そして、22年後の私は同じ日にタイ王国にいます。

2003年2月25日、新宗連結成50周年記念事業「ナムトクの丘・世界平和祈念の集い」が開催され、その折、サンプラプーン（タイ式供養塔）前の碑文銘板を新たに石碑に記したため、その除幕式も行われました。

石碑を事前に設置するため、当時、新宗連青年会から力久道臣委員長、熊野隆規副委員長、私の3名が先発隊として派遣されました。石碑は人力で運ぶことは不可能と思うほどの大きさで、人力で運び設置しました。先達の方々が思いと祈りを重ね続けてこられた場所に新たな歴史を重ねることができた思いは、今でも鮮明に残っています。

新宗連では、昨年から「すべてのいのちを尊ぶ世界実現」をテーマに特別事業を展開しています。終戦80年を迎えるにあたり、50年前から青年会が祈り続けてきたナムトクの丘において、亡き御霊への慰霊と恒久平和実現への祈りを捧げるべく平和への巡礼団を派遣することを決定しました。奇しくも、22年前に石碑を設置した力久、熊野、私の3名、肩書が変わって参加をした今回でもありました。

終戦80年とは、日本が80年間戦争を起こしてこなかった歴史でもあり、平和を構築してきた日本人の願い、思い、祈りの歴史であると信じます。新宗連は「信じること」「共に祈り合うこと」を大切に、具体的に活動を続けてきた連合体です。教えの違いがあるからこそ、その違いを知り、心を通わせ、認め、共に歩むことができます。そして「祈る」という共通点を具体的行動に移すことができます。

今回、ナムトクの丘に生み出された巡礼の場は、座って祈ることのできない、唱える声も聞こえづらいほどの強い雨が降る祈りの場でした。今こそ恒久平和実現のために、立って、声を大にして、具体的場づくりをしていくことの導きをいただいたような祈りの場でした。

（田澤清喜・松緑神道大和山教主）

栞（しおり）

平和使節団　新宗連青年会が「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（8.14式典）」の祈りを基として、1974（昭和49）年に第1次東南アジア青年平和使節団（アジア懺悔行）を派遣した。使節団はタイ王国カンチャナブリ県サイヨーク・ノイ国立公園内にタイ式供養塔（サンプラプーン）を建立し、慰霊供養を行った。以降、先の大戦で激戦地となったフィリピンやシンガポールなど東南アジア各国、中国、韓国、台湾へ平和使節団を派遣。宗教者として敵味方等を超えて慰霊と供養の誠を捧げてきた。第1次から50年にあたる第28次（昨年3月）は、使節団の原点となるタイ国カンチャナブリ県を訪問した。

《今号の紙面から》
〈2面〉新宗連「第36回教団人セミナー」、国際宗教研究所公開シンポジウム「宗教から見る中東の戦争と平和」、宗教者災害支援連絡会シンポジウム「能登半島地震から1年―被災者の苦難と宗教者の支援を振り返る」。
〈4面〉新宗連「平和への巡礼Ⅰ（タイ）」詳報。
（次号発行は6月下旬の予定です）

解脱会伝記編纂委員会編
新版 解脱金剛伝 全3巻
A5判 上製函装 定価 各巻3000円（税込み）
世相善導、人心救済への道筋を説かれた解脱会会祖・解脱金剛（岡野聖憲）の生涯を全1549頁、3巻に収めた。会祖亡き後、その人格に触れて自らの内に深い帰依心を培い、世のため人のために生きるための学びの土台となる書。第1巻＝生誕から事業の失敗、大成を経て宗教の世界に目覚めていく前半生を描く。第2巻＝昭和4年に立教して以来、人心救済の道一筋に生き、教えの土台を完成するまでの事績を辿る。第3巻＝戦時下の厳しい時代の中で縦横無尽に教えを説き、救済活動を展開し、遷化されるまでの歩みを記す。
解脱会
〒160-0007 東京都新宿区荒木町4番地
Tel 03-3353-2191(代表) Fax 03-3353-3055

清文社
宗教法人の税務調査対応ハンドブック〔宗教法人税制と法制の解説を含めて〕
石村耕治 編
A5判3780円
平成25年からの新・税務調査手続にも対応！
宗教法人と税務調査についての基礎知識を中心に整理し、コンパクトに解説した、実務家・宗教関係者必携の一冊。
公益財団法人 日本宗教連盟推薦！
〒101-0047 千代田区内神田1-6-6
☎03(6273)7946 FAX03(3518)0299
http://www.skattsei.co.jp〈価格税込〉

芸術生活社【芸生文庫】
高齢期を快く生きるための“人生の道しるべ”
老春（ろうしゅん）謳歌（おうか） 長生きの秘訣
御木徳近著
パーフェクト リバティー教団第二代教祖が、宗教家としての悟りと長い人生経験、多くの人との出会いから、高齢期を心豊かに暮らすための新しい生き方を提唱する。■定価700円（税込）
〒150-0047東京都渋谷区神山町16-1
電話03-3469-1153 FAX03-3465-6867

◉緑風出版◉
◉この秘策で生き残れ！ お金がなくともこれで安心！
しぶとく生き残る秘策77
太田哲二
2200円
◉物ばかりが値上がり、手取りの所得は少しも増えない。僅かばかりの年金では老後の生活はますます厳しくなる。どうすればいい？ 所得税や住民税節約法、医療保険や介護保険の賢い利用法、公的年金活用法など、しぶとく生き残るための秘策77！ お金がなくともこれで安心！
【現在Amazonへは出荷停止中です】
〒113-0033 文京区本郷2-17-5/税込
☎03(3812)9420 www.ryokufu.com/

没後、仕事場から発見された未発表原稿を緊急刊行。
〈ゴータマ〉の大予言
みんなが「わたしの人生」を生きるために
ひろさちや・著
◎四六判／180頁
◎定価1980円（税込）
舞台はインドの巨大財閥。巨万の富を誇る会長のもとに、予言者〈ゴータマ〉が訪ねて来ては、苦しみの世を生き抜く智慧を授ける。ひろさちや氏が遺した、現代の寓話。
佼成出版社
〒166-8535 東京都杉並区和田2-7-1
☎03(5385)2323 FAX03(5385)2334
https://books.kosei-shuppan.co.jp/

白馬社
合掌ができない子どもたち
浄土真宗本願寺派福賢寺住職 三上章道
四六判 定価1260円
『本願寺新報』の編集長を二十年に亘って務めてきた著者が、合掌ができない子どもたちとの出会いを契機に、戦後の日本社会が戦慄すべき「薄縁社会」となったプロセスを追い、その原因が宗教心の喪失にあることを解き明かす。そして新たに現出した「原発問題」にも、同根の原因があることを洞察していく。日本人の心の問題にするどく迫り、根本的解決への提言をまとめた必読書。
〒612-8469 京都市伏見区中島河原田町28-106
TEL 075(611)7855 FAX 075(603)6752
http://www.hakubasha.co.jp 価格税込

ハーベスト社
東日本大震災後の宗教とコミュニティ
星野英紀・弓山達也編 本体価格7200円＋税
東日本大震災後の福島県いわき市と相双地域のコミュニティの再建における宗教の役割（避難場所としての宗教施設、宗教教団や宗教者の動向など）を解明する
療術から宗教へ
世界救世教の教団組織論的研究
隈元正樹著 本体価格3000円＋税

緊急出版 カトリック大阪教区神父 西山俊彦
平和憲法が平和への道、改憲は戦争への道
―わたしたちが核戦争の加害者とならないために―
世が平和ボケにあろうとも、「時すでに遅し」と後悔しないために、平和憲法の真価を見直す素養まで捨てるわけにはいかない。
●1400円＋税 四六判並製
248頁 ISBN 978-4-286-19691-6
文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
☎03-5369-2299 FAX.03-5369-3066
https://www.bungeisha.co.jp
書籍のご注文はお近くの書店またはブックサービス☎0120-29-9625、ネット書店まで

マイクロアグレッション（無自覚な差別）学び議論

第36回教団人セミナー　渡辺雅之氏が事例をもとに講演

新宗連

新宗連（新宗連、石倉寿一理事長）は2月17日午後3時から、「第36回教団人セミナー」を東京・代々木の新宗連会館とオンラインの併用により開催した。

渡辺雅之特任教授

「教団人セミナー」は、新宗連結成10周年（1961年）を機に、宗教の社会性をテーマに開催され、各界の識者を講師として招き、新宗連役員を中心に学び合う場として位置付けられてきた。今回は「すべてのいのちを尊ぶ世界」実現推進事業の一環として、大東文化大学特任教授の渡辺雅之氏を講師に迎え、「『すべてのいのちを尊ぶ世界』実現のために私たちができること―ヘイトスピーチとマイクロアグレッション（無自覚な差別）」をテーマに講義を行った。

ワークショップ形式で議論を展開

渡辺氏はまず現代社会において深刻化するヘイトスピーチやマイクロアグレッションの問題を取り上げ、ガザやウクライナの紛争、さらにはアメリカ社会における排外的な動きなど、国際的な情勢を踏まえつつ、「人の命とは何か」「尊厳とは何か」という根源的な問いを投げかけた。

続いて、無意識の偏見が言葉や態度に表れる「マイクロアグレッション」が差別を受けた人の心身に深い傷を与えること、さらに放置すればエスカレートし、「ヘイトクライムやジェノサイドにつながる危険性をはらむ」と指摘。結果として、社会全体の公平性を損なう恐れがあるとし、無意識の偏見が差別へと発展する過程について詳述した。

セミナーはワークショップ形式で進められ、参加者は具体的な事例をもとに議論を展開。たとえば、旅行者に「どちらの国から？」と尋ねる行為や、外国人風の同僚に「日本語が上手ですね」と声をかけることが、相手にどのような影響を与えるのかについて考察した。こうした発言が無自覚な差別となり得る理由について、「発言者の意図ではなく、受け手がどのように感じるかが重要であり、社会的背景を考慮する必要がある」と述べた。

さらに「なぜ差別はなくならないのか」という根本的な問いについても論じた。「思いやりや優しさは重要だが、それだけでは差別はなくならない。社会の歴史や文化が人々の意識に影響を与えている以上、根本的な変革が求められる」と指摘し、具体的な方法として次の二点を提示した。

第一にバイアス（偏見）に気づくことを挙げ、「私たちはそれぞれの育った環境によって『色のついたサングラス』をかけている。その存在を自覚し、時には外してみることで、多様な視点を得ることができる」と述べた。

第二に第三者の役割の重要性を強調し、「差別が発生した際、それを受ける当事者だけでなく、周囲の人々がどのように介入するかが鍵。傍観者が声を上げ、差別的な発言や行動を許さない社会を築くことが求められる」と訴えた。

加えて「多様性こそが社会の力」との自身の考えを示し、腸内細菌を例に挙げた。「腸内には何兆個もの細菌が存在し、それぞれがバランスを保つことで健康が維持されている。社会もまた同様に、多様な価値観が共存し、互いを尊重することで成り立つ」と強調した。

質疑応答ではマイクロアグレッションの悪用リスク、偏見の機能と構造化の必要性といった質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。

最後に「争いごとは避けられないが、それを暴力で解決するのか、対話によって折り合いをつけるのかによって、社会の倫理水準が問われる」と話し、「人権とは人がただそこにいるだけで大切な存在ということ。その延長線上にすべてのいのちを尊ぶ世界がある」と結んだ。

宗教から見る中東の戦争と平和

国際宗教研究所　公開シンポジウム開催

国際宗教研究所（島薗進理事長）は2月15日午後1時から、東京・文京区の東京大学本郷キャンパスで、「宗教から見る中東の戦争と平和」をテーマに、オンラインと併用で公開シンポジウムを開催した。

当日は島薗進理事長の開会あいさつに続き、第20回国際宗教研究所奨励賞の授賞式が行われた。上智大学アジア文化研究所共同研究所員の谷憲一氏と、東京科学大学環境・社会理工学院特別研究員の玉置文弥氏がそれぞれ受賞した。

シンポジウムでは静岡県立大学国際関係学部の山本健介氏が「パレスチナ問題とイスラーム－『宗教紛争』の虚像と実像」を発表。パレスチナ問題は宗教紛争ではなく、政治的権利をめぐる対立が本質であり、宗教が紛争の一要素として利用される実態を詳述した。

また、ハマースの憲章に見られる宗教的言説の変化、政治行動の動機としての宗教、大衆動員のための宗教的アピールという三つの観点から宗教の関与を整理した。さらに宗教そのものが平和を阻害するのではなく、宗教の政治利用が問題の本質であるとし、多角的視点での理解が不可欠と主張した。

パネルディスカッションでは、市民同士のつながりの重要性を訴えた

次に急遽欠席となった立教大学教授の加藤喜之氏に代わり、帝京大学教授の藤本龍児氏が「米国福音派とキリスト教シオニズム」について発題。米国の福音派がイスラエル国家の支持を宗教的に正当化する「キリスト教シオニズム」を受容する背景として、19世紀の経験主義、20世紀初頭の原理主義運動、1950年代の宗教復興を挙げた。さらに70年代以降、福音派が「古き良きアメリカ」の復興を目指す中で終末論的思想が強調され、これが米国の中東政策に影響を及ぼしていると指摘。特にトランプ政権下での人事を例に、イスラエル支持を強める福音派の影響力を解説した。キリスト教シオニズムの変容を解明することが米国の中東政策を理解する鍵となると明かした。

続いて、東京大学大学院博士課程の犬塚悠太氏が「イスラエルの宗教右派とガザ：入植地撤退の歴史から考える」をテーマに発題。ユダヤ教宗教右派（宗教シオニズム）が領土拡大と救済を結びつけ、入植活動を通じて紛争に関与してきた経緯を分析。入植地撤退をめぐる国家の決定と宗教的信念の緊張、撤退後の過激化事例に言及した。

近年では安全保障と結びついた領土拡張論が強まり、イスラエルの与党リクードと連立する宗教政党の影響力が増している点を指摘。停戦協議においても宗教的官僚制への反対やデモが相次ぎ、今後の動向が注視されると述べた。

この後、清泉女子大学教授の松井ケティ氏とNPO法人パレスチナ子どものキャンペーン代表理事の大河内秀人氏をコメンテーターに迎え、発題者3人を交えたパネルディスカッションが行われた。

大河内氏は「対立軸は相手を認めず抹殺しようとする勢力と、民主的な平和共存を目指す人々の間にある」と指摘。また、「戦争や対立は人間の弱点を煽ることで意図的に引き起こされる。市民同士の連帯が重要」と述べた。

WCRP　ACRP　共催

ミャンマーの平和に向け宗教者のあり方を探究

チャールズ・ボー枢機卿が講演

世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会（戸松義晴理事長）およびアジア宗教者平和会議（ACRP、篠原祥哲事務総長）は2月5日午後2時から、東京・渋谷区の明治神宮のフォレストテラスで「ミャンマーの平和構築に向けた諸宗教と国連／諸団体による円卓会議」を共催した。同会議には宗教指導者や国連機関、NGOの代表者らが一堂に会し、ミャンマーの人道危機への対応や平和構築に向けた連携強化について議論を交わした。

ミャンマーでは2021（令和3）年2月1日の軍事クーデターから4年が経過したが、軍と民主派勢力との対立が激化し、死傷者が急増。さらに自然災害やパンデミックの影響も重なり、人道支援を必要とする人々は人口の3分の1超の1860万人に達し、食糧不足、医療の欠如、教育の機会喪失が深刻な問題となっている。

平和構築に向け議論、中央がボー枢機卿

会議は「平和への祈り」で開幕。WCRP国際事務総長のフランシス・クーリア・カゲマ氏が「宗教者が連携し、包括的かつ具体的な取り組みを推進することで、ミャンマーに平和をもたらしたい」と述べた。

続いて、WCRP国際共同会長のチャールズ・ボー枢機卿（カトリック・ヤンゴン大司教）が講演を行い、「戦争は悪夢であり、平和こそが希望」と強調。イスラエル・ハマス間の停戦を例に挙げ、「ミャンマーにおいても平和の実現を希求しなければならない」と訴えた。また、ウクライナやガザの紛争に国際的な関心が集まる一方、ミャンマーへの支援が後回しにされている現状に警鐘を鳴らし、継続的な支援を求めた。

質疑応答では「軍政が民族間の対立を利用し、統治を固定化している現状に対し、宗教者ネットワークはどのように関与できるのか」との質問に対し、ボー枢機卿は「ミャンマーは70年以上にわたる内戦状態にある。少数民族や宗教的少数派が連帯することが鍵」と応じた。さらに「日本の宗教指導者や支援団体が平和に大きく貢献できる」と期待を示した。

この後、国連機関や支援団体による発表が行われた。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）駐日事務所の宮澤哲氏は、日本国内でのミャンマー難民の保護と定住支援の必要性に言及。地雷廃絶日本キャンペーン代表理事の清水俊弘氏は、ミャンマーにおける対人地雷の使用拡大と深刻な被害について報告し、「日本政府はミャンマー軍との関係を断ち、正常な政治プロセスを促すべき」と語った。

最後に、今年7月に「第3回東京平和円卓会議」を開催し、紛争当事国の宗教指導者らが一堂に会し、具体的な平和構築に向けた対話を行うことが発表された。

ボー枢機卿は「宗教の違いを超えて協力し、対話を通じて平和を実現することが必要。特に若者や子どもたちの未来のため、教育や人道支援を強化しなければならない」と結んだ。

能登半島地震から1年―

被災地支援を振り返るシンポ

宗援連

宗教者災害支援連絡会（宗援連、島薗進代表）は1月9日午後1時半から、東京都千代田区の真如苑友心院で「能登半島地震から1年―被災者の苦難と宗教者の支援を振り返る」をテーマにシンポジウムをオンライン併用で開催した。

当日は真宗大谷派西佛山常福寺住職の畠山浄氏、シャンティ国際ボランティア会（SVA）の中井康博氏、カリタスのとサポートセンター長の片岡義博氏、輪島市議会議員で岩倉寺住職の一二三秀仁氏の4氏がそれぞれ発題を行った（写真）。また、パネリストとして文化庁宗務課長の山田泰造氏、大阪大学大学院教授の稲場圭信氏、弥生神社権禰宜の池田奈津江氏らが登壇。宗教学者で宗援連代表の島薗進氏がコーディネーターを務めた。

この中で畠山氏は震災を機に立ち上げた「災害支援北陸門徒ネット七尾」の活動について詳述。震災直後から炊き出しや片付け作業を行い、地域住民と共に「朔日講」という集会を始め、コミュニティ再生への取り組みを振り返った。

また、中井氏は被災地での炊き出しや避難所の運営支援の経験を述懐。炊き出し活動では延べ1万8千食を提供し、地元の飲食店と協力したセントラルキッチン事業の展開や、仮設住宅への移動図書館活動に携わったことを報告する一方、初動段階では物資のマッチングミスや情報不足が露見したと課題点を明らかにした。

この後、山田氏、稲場氏、池田氏、島薗氏による討論会と、来場者からの質問を受けての意見交換が行われた。文化庁の山田氏は、能登半島地震の被災地支援において、宗教団体が自治体や専門家と連携し、地域に根ざした支援活動を展開している点に着目。行政は宗務行政に過度に介入することなく、指定寄付制度を活用しながら支援を進めている状況を明らかにしたうえで、宗教団体の役割について「各地域で中心になっているのが宗教であり、宗教家であるので、そうしたところが幅広く、地元の人たちが心から求めているものを提供できるというのが、宗教家の強み。それが枠にとらわれずにできるというところが素晴らしい」と期待を示した。

次に、発題者として登壇した片岡氏は地元住民との信頼関係構築の重要性を説き、「被災者の心に寄り添う祈りや、毎月の追悼行事を通じて支援者と被災者をつなぐ役割を果たしていきたい」と語った。また、一二三氏は自身の寺が震災で被害を受けた経験を振り返りながら、「防災意識を高め、自助・共助・公助のバランスを取りながら地域の防災力を向上させることが大切」と訴えた。

パネルディスカッションでは非常時における心のケアや、コミュニティの再生について活発な議論が行われた。稲場氏は日頃から地域住民と信頼関係を構築する必要性に触れ、「生きる歩みを共にしてきたことが非常時にも心のケアにつながる」と指摘。「物資の提供や仮設住宅での交流の場を通じ、住民の不安を和らげるだけでなく、心の平穏を取り戻す一助となっている」と述べた。

一方、中井氏は外部支援団体として「黒子」の役割を果たし、地元住民との協働を深める大切さを強調。一二三氏は「能登半島地震の記憶を風化させず、全国からの応援の声を励みに地域復興に向けた支援活動を続けたい」と意気込みを語った。

東北大で災害支援テーマにシンポジウム

宗教者と研究者が描く「復興」の未来

宮城県仙台市の東北大学川内キャンパスで1月24日午後1時から「東日本大震災・能登半島地震の復興と支援－宗教者と研究者の対話」と題するシンポジウムがオンライン併用で開催された。主催は東北大学災害科学コアリサーチクラスター災害人文学領域コミュニティ復興科学プロジェクト、宗教者災害支援連絡会（宗援連）が共催した。

第1部では宗援連代表の島薗進氏（東京大学名誉教授）が登壇し、宗援連発足（2011年4月）の経緯、被災地支援、心のケア、追悼など、多岐にわたる取り組みを報告。さらに能登半島地震後の現地視察を振り返り、ボランティア不足や断水問題への対応といった課題に触れるとともに、宗教者や民間団体が果たすべき役割について言及した。

また、全国曹洞宗青年会や真如苑、天理教の「珠洲ひのきしんセンター」、高野山真言宗の北原密蓮氏が進める傾聴活動など、具体的な事例を通じて、地域住民に寄り添う支援の在り方について述べた。

続いて、全国曹洞宗青年会副会長の高柳龍哉氏が発題に立ち、避難所での調査や物資支援に基づく活動を報告。避難所での衛生環境の課題や地域間の支援格差を指摘した上で「不安を抱える被災者の思いに寄り添い、共に歩んでいくことが宗教者の果たすべき役割」と結んだ。

第2部では災害研究や地域文化に焦点が当てられ、研究者による発表が行われた。東北大学東北アジア研究センターのデレーニ・アリーン氏は宮城県七ケ浜と神奈川県七里ガ浜の「七七つながり支援隊」の活動を紹介し、震災後の地域間交流やコミュニティ再生への取り組みを詳述。「過去の経験を他者に生かすことで希望を見いだす」と述べた。

続いて、東北大学大学院准教授の中西太郎氏は地域文化としての「方言」に着目。東日本大震災においては、外国人や日本語が不自由な人々が必要な情報を得ることに困難を抱えたが、「やさしい日本語」の導入や地域の方言を活用した支援ツールの開発が進められた。こうした状況を踏まえ、「方言が地域文化の一部として、災害時のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たす」と指摘。さらに「方言を活用した支援ツールや文化活動は地域復興に不可欠」と述べ、地域文化の保存と活用の必要性を訴えた。

東北大学大学院准教授の小松原織香氏は熊本県水俣市や宮城県仙台市で、住民と協働し課題解決に取り組むアクションリサーチの実践を語った。「地域の課題は地域の人々が最もよく理解している」とし、水俣での「貝を拾う会」や仙台での「JINSEIプロジェクト」の取り組みを紹介。「地域の人々と共に築く対話と行動の連鎖が地域社会と研究の未来を切り開いていく」と期待を寄せた。

質疑応答では参加者から被災者との信頼関係の構築や、行政の手が届かない領域での支援方法についての質問が寄せられ、活発な議論が展開された。

新宗連青年会

青近連70周年事業 第2回学習会

ユースフォーラム受け入れの体験談

新日本宗教青年会近畿連盟（青近連、中島修平委員長）は2月7日午後7時から、大阪市の新宗連大阪事務所で青近連70周年事業の第2回学習会を開催した。

講師は元青近連委員長の益本圭一郎氏（立正佼成会）と、元新宗連青年会事務局長の大滝晃史・新宗連事務局長。青年会の二大行事のひとつ「ユースフォーラム」を2014（平成26）年に青近連で受け入れた際の2氏の体験談を基に、今後のフォーラム受け入れや、活動展開の示唆を得る機会とした。

益本氏は当時を振り返り、実行委員が皆、納得いくまで話し合うことが大事であり、「参加者の主体性を求めるだけでなく、実行委員が主体性を持てる関係作りが不可欠」と述べた。

体験談を語る益本氏（中央）

また、ユースフォーラム受け入れの準備や運営を行う中で参加者の表情や声を聞き、「青年が『心から楽しめる活動』を企画する喜びを知った」と述べ、「教団に戻り、自教団版のユースフォーラムを開催するきっかけとなり、親交を深める貴重な機会となった」と振り返った。

大滝事務局長は当時の経験を踏まえ、青近連委員への助言として、「自分が持つ活動の具体的なイメージを実行委員同士で共有する場が必要」と語り、今後の活動への期待を述べた。

青年平和式典の基本方針を確認　第5回委員会

新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会、宮本泰克委員長）は1月21日午後1時半から、大阪市の立正佼成会大阪普門館でオンラインを併用し、令和6年第5回委員会を開催した。

委員会に先立ち、午後1時半に普門館のご本尊像を参拝した。委員会では、第60回「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（青年平和式典）」の基本方針を協議。令和7年度から、開催時期は青年会結成日（11月26日）を中心とした11月に変更し、今年は11月30日に決定した。今後の青年平和調査団の訪問先をアジアに限定せず、より広範な地域も候補とし検討することとした。

その後、青少年育成セミナーの行程や、「ユースフォーラム2025」の準備状況など、今後の事業の進め方について意見を交わした。

【諸会議・報告】

委員会合同で靖国神社訪問、大塚宮司と懇談

信教委、政治委

新宗連信教の自由委員会（信教委、鈴木裕治委員長）と、政治委員会（政治委、力久道臣委員長）は合同で1月16日午後2時から、東京・九段の靖国神社を訪問した。はじめに参集殿で大塚海夫宮司と懇談を行い（写真）、本殿で正式参拝。この後、祭神の遺品などを展示する遊就館を見学した。

昨年7月、信教委委員長と政治委委員長と連名で、「靖国神社の政治利用に対する意見書」を岸田文雄首相（当時）や野党党首宛てに提出しており、また、信教委は靖国神社と交流を継続して行ってきた経緯がある。

懇談では、大塚宮司が神道の本質を「自然との共存と、先祖に感謝する生活文化」と述べるとともに、日本における平和の伝統についても言及。さらに、靖国神社について「戦争の善悪を判断する場ではなく、殉じた人々の心を未来に伝える場」と説明し、終戦80年を迎える中で国際的な情報発信の重要性を強調した。会合では信教の自由、国際的な平和維持の在り方、多様な宗教観の共存などについて意見交換が行われた。

令和7年度予算書案について協議

会計委

新宗連会計委員会は1月30日午後2時半から、新宗連会館とオンラインの併用により第33期第2回会計委員会を開催。

1月24日開催の事業計画策定会議で検討された「令和7年度事業計画案」「令和7年度事業並びに予算に関する特記事項」に基づき、2月17日開催の理事会へ提出する予算原案について協議した。

教祖への報恩感謝の働きを

第101回教祖祭 墓前式典 祥月式典

円応教

円応教（深田充啓教主）は1月6日、兵庫県丹波市本部聖地で深田千代子教祖（慈照院圓應智覺大姉）を偲ぶ、「第101回教祖祭」を執り行った。

教祖が昇天した午前5時に合わせて本殿礼拝所で「墓前おつとめ」が執り行われた。深田充啓教主と親族、教団役員による「おつとめ」が行われ、教会長と信者、崇敬者は「ささげ火」を手に教祖に祈りを捧げた。

今年は雨天のため、午前10時半から本殿で「墓前式典」を挙行。和太鼓演奏で開式し、祭主の深田教主と深田恵子恵主、責任役員らが入座。「君が代」斉唱の後、礼拝。「円応教歌」「信者訓戒」「感謝文」を奏上。「自覚反省懺悔文」を読経する中、深田教主と深田恵主、責任役員、教会長、信者らが順次焼香した後、深田教主が「回向文」を奏上した。

午後1時からは「祥月式典」が挙行された。深田教主の入席、献上の儀、おつとめの後、小坂匡弥理事長が新年のあいさつを述べ、深田教主が「御親教」を行った。

祥月式典で「御親教」を行う深田教主

深田教主は、教祖がどのような思いで行じたか、その思いを信者がどう受け止めたらいいかについて、教典199項のご遺文「我が身の上まめにて／人様に満足与える身になりたき今日の千代子の思い強き今日です」について解説した。

同遺文は、教祖が修行で京都府福知山市に赴いた際の信者への手紙の文章。その趣旨は当時、体調を崩していた教祖が健康第一（まめ）で、自身が健康であれば人様に喜びや楽しみを与えられ、共に行じることができるとの意味がある。

深田教主は「私たちには御教祖様のような厳しい行はとても無理ですが、少しでも近づけるような道具となって、『人様に満足与える』、そういう働きをしていかなければならないと思っています」と教示。自らを律し、教祖の思いを受け、人様の役に立つ働きに務めることで、自らの難をも逃れる働きにつながることを説いた。

また、ご遺文の「人様に満足与える身になりたき今日の千代子の思い強き今日です」に表わされた教祖の強い思いを「私たち信者も継承し、人様のために使っていただける道具となられていただきたい」と述べた。

そして教祖のみ教えのままに行じ、お互いが努力、精進し、悩みや苦しみ、煩いを解けるように共に行じていくことが「共に生かされることであり、働きとなります」と述べ、教祖への報恩感謝の働きに一心に務めていくことを説いた。

深田教主は今年4月、初代教主・深田長治師の五十回忌にあたることにふれ、初代教主が教祖の思いを受け遺した『円応教教典』『円応教日課勤行文』『教義概要』などがあればこそ、教祖のみ教えを学ぶことができるとして、「初代教主様のご遺徳を偲ぶとともに、並々ならぬご苦労とご功績に感謝し、そのご遺志を継承し、初代教主様に喜んでいただける働きに務めてまいりたい」と結んだ。

この後、参列者一同で「御教祖とともに」「祥月祭歌」を斉唱、「令和7年度基本方針」を奏上し閉式した。

真っ新な気持ちで日々精進を

令和7年次「御親教」式典

立正佼成会

庭野会長が御親教で「新」の字の由来を解説

立正佼成会（庭野日鑛会長）は1月7日午前9時から、東京・杉並の本部大聖堂で「令和7年次『御親教』式典」を開催した。同式典は年頭にあたり、会員一人ひとりが法縁に触れた喜びをかみしめ、仏道精進の決意を新たにするもの。大聖堂には全国から会員が参集したほか、インターネットによる式典映像のライブ配信も行われた。

式典は東京佼成ウインドオーケストラによる序奏で開式。国歌・会歌の斉唱に続き、庭野光祥次代会長を導師に読経供養が行われ、仏讃歌が斉唱された。

続いて年頭あいさつに立った熊野隆規理事長は庭野日鑛会長が『年頭法話』において「これから始まる一年は、真っ新な一年」と示したことを紹介。過去や未来にとらわれることなく「今この瞬間」を大切にする意義を強調。一日一日を初体験として受け止め、苦楽を分け隔てなく受け入れる姿勢が成長と幸福につながると説いた。

また、今年は庭野会長が米寿を迎える節目の年であることを踏まえ、「お一人おひとりが他の人を救うことで、自行にも励み、ご法で自他が救われるという、菩薩道の味わいを深めてほしい」と呼びかけた。

次いで、川口教会の教務部長が「決意の言葉」を発表した。支部長の役を兼任した教務部長は、病床の夫を支える主任夫妻との触れ合いを通して、「ご主人の病気をきっかけに心を通わせる努力をしたことで、夫婦としての絆が深く結ばれた」と振り返り、「これからも出会うすべての縁から学び、皆さまと共に、日々いきいきと精進させて頂きたい」と誓願した。

「御親教」に立った庭野会長は、聖壇上に掲げられた「素心」と「初日」の書き初めに込めた思いを披歴。「新しさすべての上に初日かな」という句を紹介し、新年への希望と決意を表明した。

次に、法華経の各品には「本化の菩薩」として、一人ひとりが世界の課題を自らの責務と受け止め、その任にあたる大切さが説かれていると説示。特に「従地涌出品」に登場する地涌の菩薩の精神を重んじ、「仏さまの慈悲の心を頂いて、世の中のいろいろなことに慈悲の心を持って向かい、日々精進をしていくことが、法華経に説かれている地涌の菩薩の精神」と述べた。

また、「新」の字の由来についても解説。「新」には辛いことがあっても努力して、何か新しいものをつくる意味合いがあるとし、「そういう心を持って、年の初めにこの『新』という字を見て、新たな気持ちを持って前進してまいりたい」と述べた。

さらに、「仏性」の概念にも触れ、仏教に造詣が深い工学博士、森政弘氏の著書『心眼―エサしか視えないカエル』の一文を紹介。仏性とは宇宙全体を貫く真理であり、私たちはその中に生かされていると明示し、「一人ひとり、新しい人間になるために努力をする。それには、自分は仏性そのものなんだということに気づいて、それをいっぱいに表していくことが大切」と結んだ。

感謝 喜びとともに精進誓う

立教74年祭

妙道会教団

参列者一同で読経を奉る（大聖堂）

妙道会教団（佐原慶治会長）は2月4日午前10時半から、大阪市天王寺区の大聖堂で「立教74年祭」を執り行った。

妙道会教団は1951（昭和26）年2月4日、佐原忠次郎師（聖師）と夫人の佐原俊江師（普師）によって立教された。聖師さまは朝夕の読誦経典「回向要品」を編纂するなど教えの根幹を顕わし、教団の基盤を確立した。58（昭和32）年8月21日に遷化。

聖師遷化の後、1959（昭和34）年3月8日、普師さまが初代会長に就任。66（同41）年、聖師の遺志を体現するため、滋賀県志賀町の地に「聖地」を選定。法華大宝塔の涌出を遺命した。69（同44）年3月28日に遷化。71（同46）年12月5日、佐原慶治師が二代会長に就任した。

立教74年祭は開式に先立ち、発会式（1951年2月4日）の映像を視聴。先達導師、会員一同の熱気溢れる想いが聖堂内に充満し、参列した会員は改めて立教の日を迎えた喜びを噛み締めた。

ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」第2楽章、三帰依文の調べとともに開式。修祓の後、佐原慶治会長により祭文が奏上され、読経が奉られた。続いて、令和7年度の導師位授与、新役員委嘱が行われ、代表者が登壇し、導師役員一同が決意を新たにした。

そして1月18日暁闇に行われた「伊勢神宮代表参拝」の様子を映像で紹介。日本、世界の安寧に思いを馳せ、大乗を祈願することの意義と大切さを心に刻んだ。

この後、佐原会長が登壇。開創者・聖師（佐原忠次郎師）の足跡を通して教団の歩みを紹介し、法華経、お題目を一心に信じ、世のため・人さまのために精進することの大切さを訴えかけると、大聖堂は溢れる感謝・喜びとともに、精進を誓い合う会員の熱気に包まれた。最後に家庭実践要訓と三大誓願を奉唱し、閉式した。意義深い立教記念日を寿ぐ一日となった。

開教87周年記念式典

「地涌の菩薩」の自覚に立つ

思親会

スライドを用いて「御親教」を行う飯島会長㊨

思親会（飯島法道会長）は2月11日午前11時から、神奈川・伊勢原市の思親大宮殿・大孝堂で「開教87周年記念式典」を開催した。

同会は1938（昭和13）年2月11日、井戸清行開祖が「我の一心は法華経に捧ぐ。法華経のために逆境に立ち、正義なるが故に、世間の留難起るとも何ぞ恐れんや。求道のために衣うすく、食とぼしくとも意に介することなし。佛子護法のために身命を捨つるは、是れ最大の本懐なり」との信念を掲げ、開教した。

以来、井戸開祖をはじめとする先達の尽力によって教団の基盤が築かれ、布教伝道を展開している。

式典は「開教讃歌」の斉唱で幕を開け、婦人部・青年部による献花献香の儀が執り行われた。続いて、飯島法道会長導師によるご供養、ご本尊授与式が営まれ、第1部が終了。第2部は会員綱領の唱和、祝電紹介、来賓紹介の後、新日本宗教団体連合会（新宗連）事務局長・大滝晃史氏が祝辞を述べ、青年女子部員が会員代表として体験説法を行った。

「御親教」に立った飯島会長は井戸開祖が法華経との出遇いを経て修行を重ね、「法華三部経を師とせよ」との天啓を受けた経緯を振り返った。さらに、法華経に説かれる「地涌の菩薩」について解説。「私たち一人ひとりが地涌の菩薩であり、妙法蓮華経を受持し、広宣流布に努めることが使命」と説示。五種法師の修行の中でも特に「受持」の重要性を説き、教えを体現し、日々の実践を通じて精進する大切さを示した。

また、法華経の真の功徳を得るための具体的な実践方法として、普賢菩薩勧発品第二十八の「四法成就」を例示。仏の加護を受けつつ功徳を積み、志を同じくする仲間とともに修行に励む意義を説いた。

さらに、人の苦しみは貪欲・執着・煩悩に起因するものであり、「法華経の教えを正しく受持することにより、因果の道理を悟り、苦難を克服する智慧を得ることができる」と説いた。最後に日蓮聖人の「法華経の一文一句すべてが仏さまの生身の身体そのもの」との言葉を引き、正しい心構えで読経供養に臨む意義を教示。「妙法蓮華経という最高の教えを受け継ぐ喜びを胸に、日々の精進に励んでほしい」と結んだ。

第47回御昇天奉祝大祭

大日如来様に感謝と帰依

光妙教会

参列者一同で「なむあみだぶつ」の唱命を唱える

大法輪台意光妙教会（川原寛雄代表代務）は1月13日から15日まで、福岡県太宰府市の本部で「第47回御昇天奉祝大祭」を挙行した。全国から参集した会員は、創始者「大日如来様」に感謝と帰依の思いを新たにした。

13日の式典は午前10時半から、「たらちねのお慈悲さま」を斉唱して開幕。木村吉宏・大祭委員長があいさつを述べた。

焼香、開扉に続き、龍誓奏楽と地搗き歌囃が奉納された。次に「生命の威光様おでまし」に移り、「生命の威光様」（聖水）を厳粛にお迎えし、正面の御法座の幕が開かれ、「大日如来様おんみたま様」（座像）が姿を現すと、参列者が「なむあみだぶつ」の唱命を唱えた。「感恩詞奉上」に続き、「大日如来様」の「御真言」（録音）が流され、参列者は深く頭を垂れ、静かに拝聴した。幕が閉じられ、「大日如来様」退座の後、来賓あいさつと祝電が披露された。続いて、御身内と役員、来賓、信徒の順で「生命の威光様」拝受が行われた。

午後7時半からは、各支部が趣向を凝らした奉納演芸（1日目）が催され、翌14日には成人式、「大法核法帰胸大気霊光様おでまし式典」が開催され、午後7時半からは奉納演芸（2日目）が行われた。

第42回庭野平和賞

国際NGO「ムサーワー」に決定

イスラーム社会で人権保護を促進

㊤ザイナ・アンワール理事長

㊦アフリカ家族法ネットワークのワークショップ（2022年、ケニア・ナイロビ）@Musawah

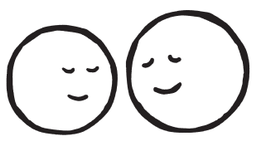
庭野平和財団（庭野日鑛名誉会長、庭野浩士理事長）は2月18日、第42回庭野平和賞を、イスラームの教えをもとに男女の実現を目指す国際NGO「ムサーワー（Musawah）」に贈ることを発表した。庭野平和賞は、宗教協力を促進し世界平和の推進に功績をあげた個人または団体を顕彰するもの。

ムサーワーは2009年にマレーシアで創立された国際NGO。本部はマレーシア・クアラルンプールにあり、理事長で共同創立者はザイナ・アンワール氏。ムサーワーとは、アラビア語で「平等」を意味する。主にイスラーム社会におけるジェンダー問題に取り組み、ムスリム家族法の改革や女性の人権保護を促進するため、地域や国際レベルで提言活動を行う。また、地域での教育や女性のリーダーシップ促進、40カ国以上に及ぶパートナー団体との協働を通じて多岐にわたる活動を展開している。

ムサーワーはイスラームを全ての人間の尊厳を等しく尊ぶ教えと解釈し、その真価を世界に発信することで現代社会に生きる人々が自他の尊さに気づき、より良い生き方の追求を後押ししている。

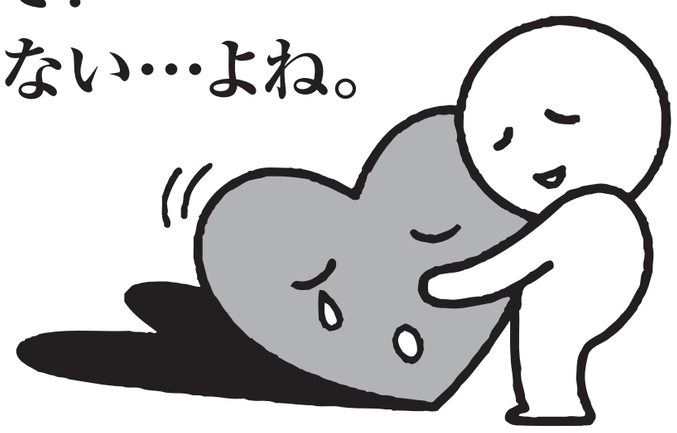
贈呈理由では「その献身的な活動を通し、市民参加の推進、人権の尊重及び平和な暮らしの実現に向け、女性が社会、法律、精神の分野において活動を牽引する機運を醸成したことを証明し、その活動を高く評価する」と述べている。贈呈式は5月14日に行われ、顕彰メダルと賞金2千万円が贈られる。

ひとりで悩まず電話して！
ホントにつらい時って誰にもいえない…よね。



●東京自殺防止センターは国際ビフレンダーズの一員です。
●私たちは国際ビフレンダーズ憲章に沿って活動しています。

●必要に応じて面接をしています。
●手紙でのご相談にも応じています。
●秘密は守られます。
●相談は無料です（通話料はかかります）。
●金銭的な援助はできません。
●医療・法律・教育関係の助言や指導は、専門家にお願いします。
●特定の思想・宗教・政党などとは一切関係ありません。



NPO法人　国際ビフレンダーズ
東京自殺防止センター
03-5286-9090
年中無休、夜8時から深夜2時30分まで
月曜は夜10時30分から深夜2時30分まで
火曜は夕方5時から深夜2時30分まで
〒169-0072　東京都新宿区大久保3-10-1 日本基督教団シロアム教会内
事務局電話番号　03-3207-5040　（FAX 03-3207-5098）
●全国にある他の自殺防止センター
国際ビフレンダーズ 大阪自殺防止センター
06-6260-4343　毎週金曜、午後1時から日曜、午後10時まで
国際ビフレンダーズ 宮崎自殺防止センター
0985-77-9090　毎週日曜・月曜・水曜・金曜、午後8時から午後11時まで
国際ビフレンダーズ あいち自殺防止センター
052-870-9090　毎週金曜、午後8時から午後11時まで

新宗連

「すべてのいのちを尊ぶ世界」実現推進事業

平和への巡礼Ⅰ－タイへ派遣

先達の御心を継承し平和実現を

戦跡を巡り 真心からの慰霊と供養重ねる

新日本宗教団体連合会（新宗連、石倉寿一理事長）は、2月22日から26日の間、「すべてのいのちを尊ぶ世界」実現推進事業の一環として、「平和への巡礼Ⅰ」をタイ王国へ派遣した。

チョンカイ共同墓地での慰霊供養

「平和への巡礼Ⅰ」一行は2月22日午前、羽田空港を出発し、タイの首都バンコクへと向かった。到着後、結団式を行い、参加者一人ひとりが決意などを語り、巡礼の意義を改めて確認。翌23日、専用バスでカンチャナブリ県へ移動し、「死の鉄道」と呼ばれた泰緬鉄道（解説①、以下数字は解説）建設の記憶が残る戦跡を巡拝した。

最初に訪れたのはJEATH戦争博物館（②）。同館には、旧日本軍のもとで泰緬鉄道建設に従事した捕虜たちの生活を伝える写真資料が複数展示されており、当時の過酷な労働環境や彼らが抱えていた苦しみを今に伝えている。参加者は戦争の悲劇に思いを馳せた。

＊泰緬鉄道（～・～ 現存路線、… 廃止路線）

クワイ河平和寺院での慰霊供養

続いて、連合国軍共同墓地（③）、カンチャナブリ慰霊塔（④）、クワイ河平和寺院（⑤）、チョンカイ共同墓地を訪れた。特に、連合国軍共同墓地には泰緬鉄道建設の犠牲となった兵士たちの墓が整然と並び、若くして絶たれた多くの命の重さを改めて実感した。各参拝地では、代表者が花を手向け、慰霊と供養の誠を捧げた。また、泰緬鉄道博物館や、映画『戦場にかける橋』の舞台となったメクロン鉄橋（⑥）を見学した。

ナムトクの丘で慰霊並びに平和祈願式典

24日、使節団はナムトクの丘に建立したサンプラプーン（タイ式供養塔⑦）を訪れ、「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」を執り行った。この供養塔は泰緬鉄道の犠牲者を慰霊するため、1974（昭和49）年に第1次東南アジア青年平和使節団（アジア懺悔行）によって建立され、平和活動の原点と位置付けている。

映画『戦場にかける橋』の舞台、メクロン鉄橋

ヘルファイア・パスを訪問

式典の開会にあたり、田澤清喜企画委員長があいさつを述べ、「戦争の惨劇を風化させることなく、宗教者として何ができるかを問い直し、世界平和のための具体的な行動をとることが大切」と訴えた。また、終戦80年にあたり、戦争の悲劇を繰り返さないという決意を新たにするとともに、「宗教の違いを越えて共に祈ることが、平和への第一歩」と強調した。

この後、参列者全員が献香と献花を行い、戦争の犠牲となった御霊に深い哀悼の意を表した。続いて、石倉寿一理事長が「世界平和祈願文」（別掲）を奏上。戦争で命を落とした人々に慰霊の誠を捧げるとともに、国際紛争や社会的分断、自然災害など、現代社会が直面する課題に言及し、「今こそ、慈悲の精神を世界に広げ、対話と協調によって平和を築くべき時である」と述べた。さらに、「二度と戦争を起こしてはならない」「武力による解決を拒否する」という「絶対非戦」の精神を掲げ、すべての命を尊ぶ世界の実現を誓った。

次いで円応教と解脱会、松緑神道大和山、崇教眞光、善隣教、大慧會教団、大法輪台意光妙教会、妙智會教団、立正佼成会の9教団の代表者が教団別礼拝を行い、慰霊と供養の誠を捧げた。

式典の最後には小坂匡弥理事が閉会あいさつを述べ、参列者と共に改めて平和への誓いを新たにした。午後にはヘルファイア・パス（⑧）やワンポーの木橋（⑨）を訪問。昼夜を問わず強制労働が課され、多くの捕虜たちが命を落とした地で犠牲者の苦しみに思いを馳せた。

解団式―振り返りを行う

25日、使節団はバンコクに戻り、立正佼成会バンコク教会で解団式を実施。巡礼を振り返るとともに、今後の平和活動の在り方について意見を交わした。

参加者からは「戦争により特に若い人が多く犠牲になったという現実を目の当たりにした」「今、ウクライナなどで続いている戦争も若い人たちがどんどん動員されている現実を思い知らされた」「改めて武力によらない平和の構築の重要性を実感した」「人間の内にある残虐さや暴力性を省みる機会だった」といった声が寄せられた。

また、これからの平和活動について、「過去を悔やむだけでなく、未来に向けて行動する責任がある」「時代が抱える課題や苦悩にどう応えるのか」「過去・現在・未来を通して、広い視野で考えたい」「慰霊の場は特定に地にこだわるものではなく、私たちの心にあるべき」「未来の世代がそれぞれの方法で真剣に平和を祈り続けていくことが大切」等の発言があり、今後、新宗連青年会としてアジアのみならず、世界各地に目を向け、新たな平和活動を推進していく方針等を確認した。

【訪問地　解説】

①泰緬鉄道

先の大戦中、旧日本軍によって建設されたタイ・カンチャナブリ駅とビルマ（現ミャンマー）・タンビュザヤ駅間の約415キロメートルを結んでいた軍事鉄道。1942年から1年4カ月という突貫工事により敷設された。旧日本軍による正式名称は「泰緬連接鉄道」。イギリスやオーストラリアなどの連合国軍の捕虜や現地住民たちに過酷な労働を強いて建設され、数万人という犠牲者を出した。枕木一本に死者一人といわれる犠牲者を出したことから、「死の鉄道（Death Railway）」とも呼ばれた。

②JEATH戦争博物館

日本（Japan）、イギリス（England）、アメリカ（America）、オーストラリア（Australia）、タイ（Thailand）、オランダ（Holland）の頭文字が名称となっている戦争博物館。旧日本軍に強制労働をさせられた捕虜が住んでいた小屋を模して造られ、泰緬鉄道建設に関連した物品や写真、捕虜の生活状況を伝えている。

③連合国軍共同墓地

旧日本軍によって泰緬鉄道建設に駆り出され、過酷な労働や事故、病気、栄養不足で命を落とした連合国軍兵士が眠る。

④カンチャナブリ供養塔

泰緬鉄道建設に従事して亡くなった連合国軍捕虜と周辺諸国から集められた人々の霊を慰めるため、1944年2月に旧日本軍により建てられた慰霊碑。

⑤クワイ河平和寺院

泰緬鉄道建設時の憲兵隊通訳で戦後、一民間人として、慰霊と平和のために生涯をかけた永瀬隆氏が1986年にメクロン鉄橋近くに建立した寺院。

永瀬氏は、新宗連青年会の第1次東南アジア青年使節団（1974年）で現地案内を務めた恩人。生涯を泰緬鉄道犠牲者の慰霊に捧げたその姿勢は、新宗連青年会の戦争犠牲者への慰霊と供養、絶対非戦の信念を育む上で大きな影響を受けた。

⑥メクロン鉄橋

クワイ河鉄橋とも呼ばれ、映画『戦場にかける橋』の舞台として有名になった。戦後、連合軍により破壊され、イギリス占領軍の命令で日本鉄道隊が再建、戦後は賠償の一環として修復作業が行われた。

⑦サンプラプーン

サンプラプーン（タイ式供養塔）は新宗連青年会が1974年に第1次東南アジア青年平和使節団を派遣した際、ナムトクの丘に建立。さらに「泰緬鉄道犠牲者の霊に捧ぐ／ここに『大東亜戦争の証人』が眠る／ブーゲンビリアの花の咲く限り／私たちは、あなた方の平安を祈りつづけます」と刻んだ碑文（日本語・英語）も建立した。2003年にはタイ語を加えた4代目の碑文を新設。2010年には36年ぶりに建て替え、再建立除幕式を執り行うとともに、「世界平和祈念の集い」およびブーゲンビリアの植樹活動を実施した。

⑧ヘルファイア・パス

泰緬鉄道建設工事の難関を極めた場所。昼夜を問わず工事は行われ、長さ73メートル高さ25メートルの山を崩し、線路を切り開いた。夜に揺れ動く炎の中で働く捕虜の姿は、地獄でうごめく骸骨の群れにも見え、燃え上がる炎は「地獄の業火（ヘルファイア）」と見えたことからこの名前がつけられた。

⑨ワンポーの木橋

泰緬鉄道建設のなかでも難関を極めたといわれる木橋（正式名称：アルヒル桟道橋）。連合軍の空襲を避けるため、岩山を削り川底に杭を打ち建設された。現在は風光明媚な場所であることから、観光名所になっている。

松緑神道大和山
田澤清喜教主

円応教
小坂匡弥理事長

解脱会
岡野孝行青年本部長

戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典 ナムトクの丘

教団別礼拝

善隣教
力久道臣教主

サンプラプーン（下部に碑文）

崇教眞光
北内良明所長

大慧會教団
石倉寿一会長

立正佼成会
熊野隆規理事長

大法輪台意光妙教会
江口陽一理事長

妙智會教団
宮本泰克代表役員

〈世界平和祈願文〉

戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典－24日

本日、タイ王国カンチャナブリ県ナムトクにおいて、新日本宗教団体連合会加盟教団の代表者が集い、先の大戦において泰緬鉄道建設に従事し、過酷な労働や傷病により犠牲となられた御霊をはじめ、すべての戦争犠牲者に哀悼の誠を捧げ、謹んで慰霊と供養の誠を捧げます。

新宗連の先師先達は教団、教義の違いを越えて手を携え、世界平和に貢献するべく「祈りと行動」を続けて参りました。人類は今、未曾有の自然災害をはじめ国際紛争、民族間の分断や対立の激化、ウイルスの蔓延等、苦難の時代を生きています。この時にあたり、私達は神仏から託された使命を自覚し、慈悲の精神を世界に拡げてゆかなければなりません。

ここにあらためて、私たちはアジアをはじめ、紛争や対立、不信関係にあるあらゆる国際問題が対話や協調により平和的に解決されることを祈ります。

そして「二度と戦争を起こしてはならない」「国際問題を武力で解決してはならない」という「絶対非戦」精神のもと、世界の恒久平和実現を祈願いたします。

また、今、私たちの生きる社会において、生きづらさを感じ、悩み苦しみ、哀しみや困難に立ち向かっている方々がいる事を決して忘れる事なく「すべてのいのちを尊ぶ世界」の実現に向け、一人一人が世を照らす灯となることをお誓い申し上げます。

令和7年2月24日
新日本宗教団体連合会
理事長　石倉　寿一

戦争の記憶を次世代へ

理事長談話

石倉理事長は解団式の中で平和活動に正解はなく、平和を願う心を持ち、実践へとつなげることが大切と指摘。青年が新たな視点で平和実現を担うことへ期待を寄せた。談話（要旨）を紹介する。

かつて、私の父をはじめ、新宗連青年会の先輩方は導かれるようにして、この地にサンプラプーン（タイ式供養塔）を建立しました。それはまさに神仏の導きであったと感じています。しかし、大切なのは供養塔ではなく、ここで何を学び、どう行動するかだと考えています。供養塔が朽ちても、その精神が受け継がれることこそ重要なのです。

私は35年前、新宗連青年会の委員長を務め、東南アジア懺悔行に携わりました。その経験から次は中国本土へと願い、実際に訪れることができました。特に満州では氷点下10度の厳しい寒さを体験しました。タイでは日本軍による戦争で約2千万人ものアジアの方々が命を奪われた現実を学びました。現地を訪れることで、戦争の悲惨さを肌で感じることができたのです。

戦争を知らない私たちは、どれほど学んでも当時の苦しみを完全に理解することはできません。しかし、歴史の現場に立つことで、当時の状況に思いを馳せることはできます。そのためにも、若い世代には「自分たちが必要だと思う活動」を積極的に行ってほしいと願っています。平和活動に正解はなく、それぞれが考え、行動することが大切です。

連合軍共同墓地では20代、30代という若さで亡くなった方々の墓碑に触れました。彼らの姿を思うと、「国のために命を捧げる必要はない」と強く感じます。戦争を起こす責任は国家にありますが、命を奪う権利はどこにもありません。すべての命には、夢を持ち生きる権利があるのです。

これから100年、200年と平和が続くことを願い、その実現のために行動していかなければなりません。その役割を担うのは、これからの時代を生きる青年たちです。

先達の先生方が慰霊活動を続けてこられたように、今後は青年たち自身が「何をすべきか」を考え、新たな発想で行動することが重要ではないでしょうか。たとえそれが従来とは異なる方法であっても、未来を拓く一歩となるならば、意義のあることなのです。

【参加者】

◎新宗連＝石倉寿一理事長（大慧會教団会長）、江口陽一常務理事（大法輪台意光妙教会理事長）、力久道臣常務理事（善隣教教主）、田澤清喜理事（松緑神道大和山教主）、小坂匡弥理事（円応教理事長）、熊野隆規理事（立正佼成会理事長）、和田惠久臣評議員（立正佼成会理事・総務部長）、大滝晃史事務局長

◎新宗連青年会＝宮本泰克委員長（妙智會教団代表役員）、岡野孝行副委員長（解脱会青年本部長・法嗣）、庭野嘉照副委員長（立正佼成会青年ネットワークグループ次長）

◎団員＝柴田勝功氏（円応教壮年会事務局長）、北内良明氏（崇教眞光バンコクお浄め所所長）、佐藤香吾氏（松緑神道大和山布教部主幹）、萩原透公（立正佼成会バンコク教会長）ほか、事務局スタッフ含め18人